千年の京から「憲法九条」　　瀬戸内寂聴・鶴見俊輔対談集

2015 年 8 月 11 日

「私たちの生きてきた時代」という副題がついているのは、お二人が 1922 年生まれの同じ年齢ということに由来しているのだと思う。京都在住の小説家と哲学者の 2005 年出版の対談集である。

お二人の価値観は非常によく似ていて、とても気が合っている印象をもった。その根底には 70 年前の戦争体験がある。自分たちだけが生き残っていて申し訳ない、という共通した思いを持ち続けてきたからだろう。

ファシズムはデモクラシーの後からやってくると鶴見氏は指摘する。

デモクラシーがあって国家の宣伝を真に受ける国民ができた時にファシズムが起こる。アメリカは長い間デモクラシーをつくってきたが、世界最強の国、最も富んだ国になった時から全体主義の国になってしまった。2001 年 9 月、ニューヨークのツインタワーが破壊された時にブッシュが「我々は十字軍だ」と正義の御旗を立て、イラク戦争を起こし、アメリカ社会はそれを許容した。

日本の平和憲法をつくったアメリカが、日本の軍国化に向けて都合の悪いことを、日本に対して要求する。今度はアメリカをバックにして日本は二度目のファシズムへと向かう。

この対談から 10 年を経て安倍内閣が強行採決した『安保法制』は、軍事的にアメリカの肩代わりをすることに他ならない。鶴見氏の指摘は正しいと思う。

さらに続けて鶴見氏は説く。

憲法九条や日本の平和を考える時に、戦後 70 年から始めてはいけない。その理由はどうしてもアメリカに寄りかかってしまうから。

もっと日本の歴史をさらに遡る視点が必要である。日本の社会の悪い流れは、日露戦争後の 1905 年から始まり現在に至っている。そして、お二人ともに現在の日本の状況がとりわけ悪いと嘆いている。1905 年以前の千年以上にわたる日本の歴史は素晴らしく、死刑がない時代、戦争がない時代もあった。

さらに、鶴見氏は日本語についてこう指摘する。

ヨーロッパの言語の中でその言語と文字の歴史がずっと続いて、今も読めるのは英語とフランス語くらいのもので、それも千年くらい前のものまで。日本語の方が頭一つ抜きんでて古い。

憲法九条をアメリカや戦後からとらえるのではなく、日本語からとらえる。日本語は千数百年の歴史をもっていて、これを使ってきた人たちがいて非常に高い文化つくってきた。小学校さえなかった明治以前の長い伝統のなかで培われたものがあって、それは、世界の中でかなりのものだということ、人を殺してはいけない、戦争しないようにするといった価値観がその中にある。

憲法九条を戦後 70 年や単なる法的解釈としてとらえるのではなく、日本の長い伝統とそれを支えてきた民衆の暮らしの視点からとらえることが重要だと改めて知った。